○議長（中本正人君）順番４、18番　土井君。

〔18番（土井裕美子君）登壇〕

○18番（土井裕美子君）休憩を挟まず続いてまいりますので、ちょっと長時間になるかと思いますが、おつき合いをいただけたらと思います。

一つうれしいニュースをご報告させていただきたいと思います。昨夜のニュースでちょっと拝見させていただいたんですが、静岡で昨日開催されましたリオ・パラリンピックの水泳の代表選考会において、中村智太郎選手が代表に内定をされたというようなニュースが出ておりました。智太郎選手は、ハンディキャップを抱えながら本当に頑張って水泳をずっと続けていらっしゃいまして、今回で４回目の出場が決定ということでございます。大変喜ばしいニュースでございますので、報告をさせていただきます。

また、今回質問するにあたりまして、観光なんですが、橋本の偉人の方々が大変多くいらっしゃいます。朝ドラ誘致に取り組んでおります前畑秀子さんであるとか、古川勝さんであるとか、数学者である岡潔先生であるとか、大畑才蔵さんとか、それから応其上人であるとか、本当にこういう歴史的な偉大な人物を顕彰することによって、また観光の何かの役に立つというか、観光客誘致につながるのではないかなというふうにさらに考えさせていただきました。

現代の有名人でも、野球選手の筒香選手であるとか、それから溝端淳平さんであるとか、大変有名な方もいらっしゃいますので、そういう方たちのことも含めて、観光に何か役に立てるような考えを、また思いめぐらせていきたいなと思っております。

それでは、議長のお許しをいただきましたので、一般質問を始めさせていただきます。

今回の質問は第１点でございます。観光客の誘致と経済の活性化についてでございます。

2015年、和歌山県では、高野山開創1200年祭や和歌山デスティネーションキャンペーン、わかやま国体と、大変注目を集めるイベントが盛りだくさん行われました。そして、その結果、大手の旅行会社の2015年の宿泊予約数は、昨年比の伸び率が和歌山県では１位にランクされたというようなことが出ておりました。

そしてまた、今年はＮＨＫの大河ドラマ「真田丸」も始まりました。今後も観光客の増加が見込まれることが予想されております。

そこで、この機会を絶好のチャンスととらえ、橋本市においても観光客の誘致と経済の活性化に全力で取り組むべきと考えて、何点か質問をさせていただきます。

①高野山開創1200年祭やわかやま国体、ＪＲの和歌山デスティネーションキャンペーンにおける橋本市での集客数の把握と、その経済効果の検証はされましたか。

②観光こそ広域で取り組むべき課題として、ＮＨＫの大河ドラマ「真田丸」を九度山だけのものと考えず、本市として具体的な観光客の誘致策はありますでしょうか。また、その経済効果と誘客数の見込みはどのように考えていらっしゃいますか。

③合併後10年という節目を迎え、橋本市の経済を今後どのように活性化していくのかを早急に考える必要がありますが、その具体策と課題についてお答えください。

④今後も橋本商工会議所と高野口町商工会のさらなる連携強化は不可欠と考えますが、現状と課題があればお教えください。

以上で、私の壇上からの質問は終わらせていただきます。明快なご答弁よろしくお願いいたします。

○議長（中本正人君）18番　土井君の質問、観光客の誘致と経済の活性化に対する答弁を求めます。

経済部長。

〔経済部長（笠原英治君）登壇〕

○経済部長（笠原英治君）観光客の誘致と経済の活性化についてお答えします。

まず、１点目についてですが、平成26年度の世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の登録10周年を契機とした和歌山デスティネーションキャンペーン期間中での本市の入込み客数は約29万9,000人であり、前年同期比104.5％の増加となりました。また、平成27年度では、４月２日から５月21日の間、高野山開創1200年記念大法会が、秋には紀の国わかやま国体が開催され、期間中での本市の入込み客数は約41万3,000人で、前年同期比134.4％の増加となりました。

経済波及効果としては、平成23年度国体推進室の発足時から平成27年の国体終了時までで約１億4,500万円となりました。なお、高野山開創1200年記念大法会と和歌山デスティネーションキャンペーンでの経済波及効果について、具体的な数値は把握できていませんが、宿泊客数の増加、お土産の販売等により、経済効果は大きかったと考えています。

続いて、２点目の、ＮＨＫ大河ドラマ「真田丸」にかかわる観光振興を広域で取り組むべきという点についてお答えします。

まず、和歌山県と橋本、和歌山、岩出、紀の川、かつらぎ、九度山、高野、紀美野の８市町と観光関連団体を加えた戦国わかやま誘客キャンペーン推進協議会を組織し、受け入れ対策事業として「いざ出陣！戦国わかやまスタンプラリー」の実施を本年１月10日から来年の１月９日まで行い、紀北エリアを中心とした、真田、徳川、戦国ゆかりのスポットや観光施設めぐりを促進します。また、「真田幸村・大阪城入城ガイドウォーク」では、真田幸村が九度山から大阪城に入城した道のりを観光ガイドと歩き、６回に区切って大阪城をめざすもので、本市は第２回目の６月11日を予定しています。加えて、本市独自の取り組みとして、６月５日には真田丸攻防戦をイメージした国際合戦フェスティバルを橋本小学校跡地で行います。また、秋には、南海りんかんバス所有の「真田赤備えバス」を平日に走らせ、橋本市内の真田ゆかりの地をめぐるツアーを予定しています。

その経済効果と誘客数の見込みですが、戦国わかやま誘客キャンペーン推進協議会では、真田ミュージアムの入場者20万人以上、高野山の入込み客数30万人以上増加、紀北エリアにおける宿泊客２％増加と予測しています。

続いて、３点目の、本市の経済活性化についてお答えします。

現在、本市では経済活性化に向けた取り組みを三つの柱として推進しています。

一つ目は、食を通じたはしもとブランドの確立であります。橋本市における地域資源を活用し、食を通じた新商品の開発及びブランド化を推進し、地域社会の発展と地域産業の振興を図ります。

二つ目は、地場産品のブランド化であります。特産品のブランド化や新商品の開発、地場産業の振興、農林業の再生を推進します。

三つ目は、広域での観光振興であります。従来型の行政を中心とした観光振興のあり方に限界が見えてきており、観光ニーズの環境変化に対応していくために、民間主導の広域

観光ビジネス共同体を設立し、観光振興を進めます。課題としては、観光振興を目的とした法人を設立するにあたり、経験豊富な人材を確保することが課題であると考えています。

次に、４点目の、市内商工団体の連携についてお答えします。

まず、商工会議所と商工会は、もともと違う法律に基づき組織されたものでありますが、よく似た事業形態であり、会員の規模としても同じく小規模事業者で組織されています。本市としては、二つの商工団体を連携した一つの組織とし、行政とかかわっていただけることが望ましいと考えていますが、おのおのに課題もあると考えられますので、両団体との関係をより一層築き、状況に合わせて対応していきたいと考えています。

○議長（中本正人君）18番　土井君、再質問ありますか。

18番　土井君。

○18番（土井裕美子君）それでは、一つ目から、重なっている部分もあるんですが、一つ目からいきます。

まず、大変多くの観光客の方が昨年よりは来ていただいているということで、実証検証をされたという、和歌山県の観光客数の実証検証をされたんですが、それを検証されて、本市にとりまして今後の観光振興のあり方というのは、橋本市としてはどのようなお考えを持っていらっしゃるのかということが、まず１点と、今、国のほうでは地方創生戦略というような形の中で、観光プラットフォーム構築というのをよく聞くことがあるんですが、今議会の補正予算の中にも、たしか観光プラットフォーム構築についての予算が上げられていたと思いますけれども、大きなところから、本市としては、その２点についてどのようなお考えをお持ちであるのかということを、お聞かせいただきたいと思います。

○議長（中本正人君）経済部長。

○経済部長（笠原英治君）壇上でも答弁させていただいたんですけど、これからの観光振興は、誰にでも平等な行政主体のやり方には、もう限界があると思います。これからは、観光関連事業者はもちろんのこと、ほかの産業、そして住民が一体となって、観光客を受け入れる観光地域づくりが求めていかれると思います。

行政としては、頑張る事業者に寄り添いながら、徹底的に消費者目線で観光の振興を応援していきたいと考えております。

それと、橋本市だけで観光振興を完結させるのは、非常に無理があると考えています。それがたとえ高野山であっても、ここだけでいわゆる着地型の観光を完結させる、旅行目的を完結させるというのは、現実的ではないのかと思っております。むしろ、橋本とその周辺にできるだけ滞在していただき、時間とお金を消費していただく仕組みづくりと旅行商品の売り出しが必要だと思います。

こういうことから考えても、広域圏での地域連携、協力を意識した組織づくりが必要になってこようかと思います。

２点目の、プラットホーム、いわゆるＤＭＯなんですが、これは広域観光ビジネス共同体、デスティネーション・マーケティング／マネジメント・オーガニゼーションと、よくヨーロッパで一番普及されておる形態なんですが、観光の戦略策定とか各種の調査、マーケティング、商品の造成であったりプロモーションを一体的にワンストップの窓口で実施していく、そういう法人であります。そういう組織です。これは非常に地方創生事業として国も力を入れておりますので、ぜひともこの事業に橋本市としても乗っていく準備を進めたいと考えております。

○議長（中本正人君）18番　土井君。

○18番（土井裕美子君）それは大変いいことですし、その理念のもとにこれから観光行政をやっていっていただくと、本当に橋本市はすばらしい注目されるまちになっていくのではないかなというふうには考えるのですが、２番に入ります。

今、戦国わかやま誘客キャンペーン推進協議会ですか、和歌山県が事務局となって、橋本、和歌山、岩出、紀の川、かつらぎ、九度山、高野、紀美野の８市町と観光関連団体が協議会をつくってやっているということでございましたが、このパンフレット、議員の皆さまも見たことがございますでしょうか。多分、あまりご存じないかなと、私もこの質問をするにあたり、はじめて目にしたんですが、この「真田幸村と戦国わかやま物語」というパンフレットの中に、先ほど部長がお答えいただきました「いざ出陣！戦国わかやまスタンプラリー」であるとか、それから、大阪城入城のガイドウォークであるとか、国際合戦フェスティバル、これは橋本市独自の取り組みということでございますが、そういうものが載せられております。

そして、これは８市町が連携してやっておりますので、紙面の関係上、いろんなクーポン対象施設というのもあるんですが、各市町で４箇所ぐらいしかクーポンを発行しているところがないんですが、これを見ていただくと、それなりに取り組んでいっていただけてるのかなという気はするんですが、これ、あまりにも、まだ市民の皆さまもご存じないことですし、それから、なかなか目にする機会がないのかなと思うんですが、これはどのような場所に設置をされていて、橋本市は何部ぐらい、多分県がつくってるのかなと思うんですが、県のほうから何部ぐらい、この冊子をいただいているというのはわかりますでしょうか。

○議長（中本正人君）経済部長。

○経済部長（笠原英治君）ただ今ご質問ありました、まさに８市町、和歌山県が主体性を持ってやっておるわけなんですが、いろんなイベントをするにあたって、関係市町、そして県が事務局の中で協議しながら、事業の内容については決定しております。

その中で、昨年末に仕上がってきたパンフレットが、この「真田幸村と戦国わかやま物語」というものなんですが、ＮＨＫのほうにもかなり支援していただいて、でき上がってきたものでございます。

こういったパンフレットにつきましては、当然、各行政、それと観光客が立ち寄るような道の駅であったり、観光協会、観光案内所、商工団体、そういったところに配布させていただいております。部数については、県のほうが一括して取りまとめておりまして、できるだけ必要部数については今のところいただけることになっておりますので、もし、さらに置いていくということになれば、また県のほうに訴えていきたいと思います。

○議長（中本正人君）18番　土井君。

○18番（土井裕美子君）今現在、何部というのはわかりませんでしょうか。

○議長（中本正人君）経済部長。

○経済部長（笠原英治君）ちょっと今、手元に資料ございませんので、調べて後から答弁させていただきます。

○議長（中本正人君）18番　土井君。

○18番（土井裕美子君）大変良くできておりますし、これはぜひともいろんなところで、観光にお越しいただいた方も含めて、コマーシャルをしていただきたいと思います。

今回、この真田丸、私もファンの男優さんが出ておりますので、いつも急いで帰って見てるわけでございますが、大変おもしろくて、特に、地元のお話が出てまいりますので興味

深く拝見しているんですけれども、市民の方からのご質問を受けての、私、この質問をさせていただいているんです。せっかく今、真田丸で注目されて、橋本市にたくさんの観光客の方が通っていただいているのに、橋本市は真田丸と関連させて、何かイベントとかをしないんですかというような、市民の方からのご質問を多くいただいておりましたので、この質問をさせていただいております。

絶好のチャンスだと思うんですね。高野山の開創1200年祭も本当にあっという間に終わってしまいましたし、それから、わかやま国体も、何かこうばたばたしているうちに終わってしまったのかなということで、観光客は統計上言われますと、和歌山デスティネーションキャンペーンが29万9,000人であるとか、開創1200年、わかやま国体も含めて41万3,000人であるとかが来ているにもかかわらず、果たしてどれだけの観光の方が橋本にお越しになっていて、橋本でお金を落としていっていただいたのかなというのが、ちょっとクエスチョンというか、あまり実態が見えていないこともございますので、この質問をさせていただいたんです。

市長はよく、オール橋本で取り組みますというふうなことをおっしゃっていますけれども、今このときこそ、本当に市長はじめ行政と、それから市民と民間の事業者さんと、そして地域コミュニティが一体となって取り組むべき時期であると思うんですけれども、市民の有志の方も、何かこの機会に自分たちでできることをしたいなというふうに思ってらっしゃるかと思うんですが、真田丸応援隊というのが、高野口地域と橋本地域で市民の方を中心に立ち上げられているということをお聞きしたのですけれども、それは経済部としてはご存じでしょうか。

○議長（中本正人君）経済部長。

○経済部長（笠原英治君）ＮＨＫの大河ドラマ「真田丸」を活用して、中心になっておるのは市内の商工業者の方が中心になって、橋本市全体の活性化を促すチームとして、去年の末に発足されました。

応援隊の話とは、決して九度山町の真田イベントに直接かかわっていくという、そういうものではなくして、例えば、高野口駅からであったり、橋本駅からであったり、九度山の真田ミュージアムのあるところへ行く経路の中で、できるだけ市内の飲食店やお土産屋さんとか、さらには宿泊施設を利用していただけるような、そういった仕組みづくりをしていこうという、そういう取り組む組織だと聞いております。

具体的に、商工会議所関係では40人、高野口の商工会関係では30人、約、今70人の参加によって組織化されておるようです。具体的な取り組みというのはこれから考えていくようなんですが、まず、そういった雰囲気を感じていただくために、六文銭ののぼりであったり、ちょうちんをこの導線経路の中につけていくと、そういうふうに聞いております。

以上です。

○議長（中本正人君）18番　土井君。

○18番（土井裕美子君）ありがとうございます。私も、そういううわさがあって、何とか応援したいなということで、メンバーの一人に加えていただいておりますので、また行政と、そういう民間、市民の方々との連携をしっかりとっていただいて、何かやっていただけたらと思います。

九度山町は、行政区は橋本市と別なんですけれども、真田幸村さんは大阪城に行かれるときには、いろんな説があります。風吹峠を通ったとかいう説もありますけれども、絶対に紀見峠を通って大阪城へ入城されていると。最初は10人ぐらいの家来を連れて行かれたん

だけれども、その間にどんどんどんどん兵が増えて、大阪城へ行くときには、もう何百人の赤備えの兵ができたというようなことも史実に基づいた話としてございますので、決してお隣のことではない、一体感を持った九度山の真田丸として応援していってあげていただきたいと思います。

なんばの駅にも大きな階段は、もう真田丸一色ですし、橋本駅に降り立ちましても、もう今、真っ赤っ赤の旗も立ってますし、この間は、３月１日でしたか、ＪＲの戦国ラッピング電車の走る記念セレモニーも、橋本駅と、それから高野口の駅で開催されまして、すごくいいムードが盛り上がってますし、大変いいと思いますので、ぜひとも、もっともっと力を入れてやっていただきたい。

それから、もう一点は、「真田幸村と戦国わかやま」と書いてある、この六文銭と武将が書いてあるロゴは、これはもう誰が自由に使ってもいいというロゴですし、それから、「ゆきむらさま」というんですか、九度山町が出している、漫画的なところに角の生えた幸村さんのかわいいキャラクターも、使用許可さえもらえば誰でも使えるというものですから、ぜひとも、そのゆきむらさまと橋本のはしぼうが、手を取り合って何かをしているとかですね、そういうふうな商品開発も推進していただけたら、注目されるのではないかなと思います。

なかなか九度山町にお越しいただいただけでは、九度山町のエリアも割と手狭なところもございますでしょうし、駐車場についてもお困りのこともありますでしょうし、お隣の高野口が協力をさせていただくであるとか、それから、観光客が二十何万人も増えて真田ミュージアムに来られても、やはり食事をする場所であるとか、お土産物を買う場所が、九度山だけに限らずいろんなところにもあったほうが、消費者目線的にはいいのかなと思いますので、橋本も、今オムレツのまち橋本ということで、めざしてやりつつあるんですが、九度山にお越しの節には、また真田庵、九度山ミュージアムを回って、橋本でオムレツの美味しい料理を食べて、くにぎ広場に寄っていただいて、はたごんぼも買っていただいてというような、そういうふうなおもしろい観光ルートというのをつくっていただけたらいいと思います。

また、隅田のほうには隅田八幡には人物画像鏡が国宝としてございますし、それから、真土の飛び越え石であるとか、学文路の苅萱堂の人魚であるとか、利生護国寺であるとか、名古曽廃寺から出た三彩の壺は、今、アザレアに置いてあるんですかね。アザレアにレプリカが置いてあったりとか、本当に名所がいっぱいありますので、そういうルートをお示しいただいて、観光客の方が、リピーターを増やすということが大事やと思うんです。

九度山に来て、高野山に行って帰るよというんじゃなく、九度山に来たついでに、高野山に行ったけれども、次は橋本に来ようかなとか、かつらぎに行こうかなとか、そのためにも、しっかりと広域の連携をしていただきたいんですが、一つ目のお答えの中で、プラットフォーム事業構築の中で、ＤＭＯという、広域観光ビジネス共同体を設置するつもりだということがありましたが、それは多分もっと大きなことを考えてらっしゃると思うんですが、今、今年、九度山町と高野山とかつらぎ町も含めた自治体間の広域連携というのは、どんなふうに考えていらっしゃるのかというのが、もし何か具体的な案とかがあれば、ちょっと言っていただいたらと思います。それだけ。

○議長（中本正人君） 経済部長。

○経済部長（笠原英治君） 当然、地域連携と

いうのは大切になってまいります。その中でも、正月から始まった大河ドラマ、非常に視聴率も高いですし、何か関西では、もう30％に迫るぐらいの勢いらしいです。上田市はそれ以上に高いらしいんですけど、これからシーンがだんだん和歌山のほうに移ってまいりますので、ますます視聴率も上がって来ようかと思います。

そういう中で、今、実は観光協会主体で、先ほど壇上でも答弁させていただいたんですけど、南海りんかんバスの赤備えバスをラッピングしていただいて、それで幸村ゆかりの地、例えば、織田秀信の終焉の場所であったり、定福寺、利生護国寺、隅田八幡、子安地蔵、橋本駅を回ってという、そういう三つほどのコースを既にメニュー化して、４月から観光客を中心に回ろうという計画があります。だいたい、月に２回か３回ぐらいの頻度で回りたいと思っておるんですけど、日曜日は、そのラッピングバスは九度山町で使用されますので、平日に利用させていただきたいなと思っております。

あと、先ほどお話にも出ました、南海、ＪＲともにラッピング電車ができてますので、せんだって、私も市長と一緒に橋本駅と高野口駅へ行かしていただいて、橋本駅では、市長がいろいろごあいさついただいた中で、地域連携について進めていくんやというお話もいただいてましたし、高野口駅では、九度山町も町長が来られて、そういうお話をいただいています。そういった形で、来年度は積極的に地域連携を進めていきながら、最終的には大きな広域で連携していくようなプラットフォームに結び付けていきたいなというふうに考えております。

以上であります。

○議長（中本正人君）18番　土井君。

○18番（土井裕美子君）もうこの機会が最後やというようなつもりで、しっかりと観光に力を入れていっていただきたいんです。パンフレットができたから駅に置いてますとか、観光協会に置いてますとか、この下の商工観光課に置いていますというのでは、誰も目にとめてくれないですよね。

だから、前に同僚議員が質問されていたことがあると思うんですけれども、なんばの駅でパンフレット、橋本に住んでくださいというパンフレットとかを配るのもいいんだけれども、実際に高野山とかで行って、観光客の方にこういうパンフレットであるとか、それから、今部長がおっしゃった、橋本では平日に橋本と九度山の関連のところを回るバスも出していますよというような、そういう、パンフレットを渡すような具体的な行動を起こしていただきたいなというふうに思うんですけれども、置いてますから、設置してますから、というのでは、なかなか受け取っていただけない。何か余って、最後にはごみになって捨てられてしまうというのでは、本当にもったいないですのでね。

で、先ほど言っていただいた、市民の方が有志で立ち上げていただいた真田幸村応援隊の方たちも、総勢で今70名いらっしゃるわけですし、これを聞いていただいた議員さんたちの中にも、それだったら自分も応援隊に入って、何とか一肌脱ごうやという方もいらっしゃると思いますし､部長さんもあわせれば、もう100名ぐらいにはなるかと思いますので、そうやって皆で、どうぞ橋本市にもお越しくださいよという形の、具体的なアクションを起こしていただくということが大事だと思いますので、置いて終わり、設置して終わりというのではなくて、それをいかに人の目の届くようにするかという知恵を出していただいて、行動に移していただきたいと思います。

高野山で配っても、高野山もメリットがあ

る話ですし、また、２回目、３回目来ていただいたらいいわけですしね。九度山の観光されてる方に配っても、何も九度山町の観光客をこっちへとってやろうという思いではなくて、また２回目、３回目、九度山にお越しいただいたときには、橋本という隣の町にも、こういう立派なおもしろい名所・旧跡があるんだよということをお知らせするということだけでもリピーターにつながりますので、１回でやっぱり観光客がこの周辺に来て、ああもう何も見るところないなというふうに帰ってしまってはもったいないですから、それのためにも、かつらぎ町、九度山、橋本、高野と、この四つがしっかりと連携を取り合って、協力をし合うということが本当に大事だと思いますので、その辺のところ、しっかりと肝に銘じて、この１年というか、もう始まっていますので、頑張っていただきたいと思います。

それから、地域間連携というのが地方創生の中で盛んに言われているわけですけれども、観光客の誘致で、そのほかのところとも地域間の連携を結ぼうというようなことは、お考えになったことはございませんでしょうか。

○議長（中本正人君）経済部長。

○経済部長（笠原英治君）壇上でも答弁させていただきましたように、これからの観光振興というのは、行政主体より企業主体で取り組んでいきたいと考えておりますし、行政と企業が一体となって観光振興を進めていくべきだと考えてます。

そういう部分で、今、地方創生のＤＭＯ予算、非常に国のほうでも有利につけていただけております。その中で、将来的にＤＭＯを立ち上げていく可能性があるということで、この１月に、１回目の仮申請をさせていただいております。

その中で当然、連携する事業者であったり、行政の方とご相談申し上げて提出する必要がありましたので、横断型のプラットフォームを設置するにあたり、連携予定事業者として、アクセスの改善であったりプロモーション関係ではＪＲ、南海電鉄、ユタカ交通、日の丸観光バス、プロモーションと旅行者の受け入れ体制整備ではルートインホテル、ルートインジャパンですね。それと、商工会、商工会議所とその会員の企業、団体。それと、大きな観光資源となり得る高野山金剛峰寺、吉野山の金峰山寺、これも、高野山の金剛峰寺系列になるんですが、ここともお話しさせていただいております。

行政関係では、地域連携事業自治体としてかつらぎ町と地域連携という、いわゆるこの地方創生の採択条件にもなってまいりますので、町長さんにお話しさせていただいて、両者の連携で申請書を出させていただいております。

あと、協力自治体としては、高野町、九度山町、五條市、吉野町、河内長野市、田辺市、そして和歌山県。そういったところと既に協議を進めさせていただきながら、具体的に動いておるような状況であります。

○議長（中本正人君）18番　土井君。

○18番（土井裕美子君）この絶好の機会をしっかりととらえ、頑張っていただきたいと思います。２番に関しましては、同僚議員も後でまた質問をされるかと思いますので、私の足りない部分をまた補っていただけたらと思います。

３番目の質問でございますが、合併後10年ということで、今、市長が、オール橋本で「はしもとブランド」の構築ということで、しっかりと頑張っていただいて、＋（プラス）はしもとＰＲＯＪＥＣＴということで、レッグウォーマーの開発であるとか、それから、この前も企業連携をされまして、柿ピクルスで

あるとか、イノシシの肉と柿のジンギスカン風焼き肉ですか、その＋（プラス）はしもとＰＲＯＪＥＣＴ事業で成果を出していただいているところでございますけれども、やはり、「はしもとブランド」という名前を使う以上は、地元で生産し、製造し、それから加工販売されているというようなものを、しっかりブランド化するということも本当に大事かと思うのですが、その辺の、「はしもとブランド」というお名前をつけられている定義というのは、何かございますでしょうか。

○議長（中本正人君）経済部長。

○経済部長（笠原英治君）市長が就任してから、公約で橋本の産品を全国、そして海外へ売り出していく、販売促進、販路開拓を積極的に行うということで、去年の４月にブランド推進室が立ち上がって、経済部中心に取り組みさせていただいておるんですが、いろんな考え方があるんですが、今のところ、本市で生産された農産物であったり、地域資源、それは農林水産物であったり、産地の技術、そういったものを活用した商品である。そして、市内で生産、製造、販売されるもの、いわゆる地場産品、そういったものが「はしもとブランド」としてなるというのは、これは当然のことだと思います。また、これを広告宣伝することによって、製品の評価や本市のイメージアップにもつながるとか、消費者の購買意欲の喚起にもつながってまいる、そういったことにつながるようなものを、「はしもとブランド」と定義しております。

ただ、本市の地域資源を活用した商品で、産品であるんですが、市外、県外の方に生産、製造、販売されるものであっても、本市とその企業との間で覚書を交わしまして、「はしもとブランド」の推進であったり、地域産業の振興のために共同で商品開発やブランド化を進めていただく場合には、これについても「はしもとブランド」としております。

具体的に、今、議員からもあったんですが、イオンドクターの製品、これは生地は橋本、染めるのも柿で染めてますし、レッグウォーマー、お腹のウォーマー、そういったものであったり、先日プレスのほうに発表させていただきました柿ピクルス、これは北海道の丸タ田中青果という会社と覚書を交わさせていただきました。それと、鳥獣害で出てきたイノシシの肉、これを利用してジンギスボタンを、これは市内の事業者なんですが、インダレートと覚書を交わしております。

この後、この＋（プラス）はしもとＰＲＯＪＥＣＴで出てくる予定の商品としましては、高野口の再織りを利用したクッション、オーガニック素材のベビー服、小物、そういったものであったり、湯浅の老舗の金山寺味噌の会社があるんですが、そこにもジビエ料理として、鳥獣害でとれたイノシシの肉を利用した加工品を、今、試験的に製作していただいておるような状況であります。

そういったものも含めて、「はしもとブランド」として位置付けておる次第でございます。

○議長（中本正人君）18番　土井君。

○18番（土井裕美子君）橋本には、本当に食材もございますし、繊維では、私もこの筆箱、これ、再織りですよね。持ってるんですけど、こういうのをしっかりと製造して、製品化して販売をするということが、やっぱり今後必要になっていくんですが、橋本市で生み出された「はしもとブランド」の商品というのを、例えば、名前は何でもいいんですが、高野山麓はしもとブランドとか名前をつけて、シール化して、シンボルマークをつくって、貼って、売り出すというような、あの、今治の今治タオルがやってると思うんですけれども、それを見たら、「あ、今治タオルや」と、私たち主婦目線ではすぐわかるんですけど、そう

いうふうなくくりを、マークを見たらすぐ、「あ、これ、橋本のやで」とわかるような、そういうのも大事かなと思うんですけれども、知名度も高くなりますし、観光の誘致にもつながるのではないかなと思うんですけれども、そういうアイデア､提案をしているんですが、それはいかがですか。

○議長（中本正人君）経済部長。

○経済部長（笠原英治君）全国では、地域ブランドを全面的に出して、そういう取り組みをされているところが結構あります。島原ブランドであったり、近くでは、大阪の佐野ブランド、そういったものが積極的に活用されておるようなんですけど、おっしゃられるようにシンボルマークをつくって、一括で情報発信することは、非常に地名の認知度も高まってまいりますし、ひいては観光の誘客にもつながってくると思います。いわゆる一種の橋本市のお墨付きにして、消費者への安心と全国に通じる高い商品力があれば、非常に消費喚起につながってこようかと思っています。

ただ一方で、そのブランドというのは、あくまでも消費者が選ぶものでございまして、行政が一方的に事業者に押しつけるものではないというふうな考え方もありますので、今のところ行政としては、頑張っている企業に対しての商品開発であったり､事業開拓とか、販路開拓、販売促進に向けて取り組んでいる事業者に支援させていただくことが、将来的にはブランド化につながってこようかと思っておりますので、そういった部分に積極的に取り組んでおる次第です。

○議長（中本正人君）18番　土井君。

○18番（土井裕美子君）何かわかったようなわからんような答弁だったんで、結局どうしてくれるんかなと、何か感じなんですが、行政が旗を振ってやる部分と、民間事業者にお任せする部分と、というのが必要だと思うんですが、今後そのプラットフォーム事業というんですか、横文字で言うとＤＭＯ、日本語で言うと広域観光ビジネス共同体というところを設立されて、今後やっていっていただくということもお話の中でずっと出てきてますので、そういうところは、例えば、こういうブランド化をしたものを一括してやっていくというようなことも考えられていきますので、そういうアイデア、一つのアイデアとして、ひとつ検討していただけたらなと思います。

４番に入ります。合併後、ちょうど10周年を迎えまして、今までは橋本商工会議所と高野口町商工会があったんですが、法律の改正があったようで、たくさん合併をしている市町村においては、商工会と商工会議所の合併も、以前よりは大変やりやすくなったというような情報が入ってきております。

別に、それぞれの団体ですので、こちら側から一緒になってくれとはさらさら言えませんが、今後、より大きな、橋本市だけの問題ではなく、広域でかかわっていく観光行政を担っていく民間事業者が、やはり一つ一つ違うくくりの中で動いていくというのは、問題があるようなこともあるんじゃないかなというふうに考えておりますし、問題点として、課題として、今、市のほうからもおっしゃっていただきましたので、この10年目にあたって、橋本商工会議所と高野口町商工会の皆さんと、一度同じテーブルに着いて、今後この橋本市の経済界というのを、どのような方向性で導いていくのかという、そういう協議というのが必要なのではないかなというふうに考えております。

法律をいろいろ調べてみますと、商工会議所と商工会の取り組みの今後のあり方については、合併のメリット、デメリットなどを含めて、当事者としても当事者間の議論や地域商工業者のニーズを踏まえつつ、検討を行う

べしというふうになってますので、一旦やはりメリットとデメリットを、この際、この10年目にあたり、同じテーブルに着いてそれぞれが協議をしていただいて、やはり別々でいくほうがいいのか、それともこの際合併をする方がいいのか、合併をしてもしなくても連携がきっちりととれていれば、そんなん全く問題ないので、今までどおり連携をしっかりとって、このままで推進していきましょうというのであれば、それはそれでありがたいことですし、一旦この機会に同じテーブルに着いて、さらなる橋本市の発展に向けて協議をしていただくという場を、市長が音頭をとっていただいて、設けていただくというようなことはいかがなものでございましょうか。

○議長（中本正人君） 市長。

〔市長（平木哲朗君）登壇〕

○市長（平木哲朗君） 土井議員の質問にお答えをします。

合併については全く考えておりません。というのも、今、橋本市の観光案内所は商工会議所へ、裁ち寄り処は高野口町商工会へというふうにお願いをしているわけです。実は、プレゼンをやりました。商工会議所、商工会とも。その中で、両方の話を聞かせていただいたんですけども、なかなか商工会議所、商工会でそれを、例えば観光であるとか、ブランド推進であるとかというのを進めていくというのは、非常に無理があるなという認識を持ちました。

現在の商工会議所と商工会の違いというのは、一番大きいのは財政力の問題かなというふうに思います。やはり、橋本商工会議所というのは、あの商工会議所を建設したときの借金が未だに残っておりますし、逆に、商工会につきましては、お金があると。これを一緒にするというふうなことを考えていくとすれば、その商工会議所の負債を、うちが建て替えるような形でないと前へ行かないのかなというふうに思っておりまして、残念ながらかなりの大きい額の借金も残っておりますので、それはなかなか難しいなということで、ブランド推進室を立ち上げて、今回、商工会議所、商工会、ＪＡも一緒になって、まちの経済の活性化に取り組んでいきましょうという取り組みを始めてます。

そういう中でしっかりとした、商工会議所に協力してもらう部分はやっていただく、商工会でやっていただく部分は商工会でやっていただくとしたほうが、より効率的に動くのではないかなというふうに思っています。合併の協議というのは、やはり当事者同士がその舞台に乗ってこないと、なかなか前へ進みませんので、そういうふうに考えています。

これからというのは、やはりまず大切なことは、商工会議所、商工会ではなくて、民間の人たちがどれぐらい、ほな頑張ってみようかということを思っていただけるかどうかやと思うんです。まちの経済の活性化にしてもそうだと思うんです。そういう部分では、ほんまにこれから、民間の企業一緒にやりましょうということを一緒に進めていかないと、行政が前に立ってこれやりましょう、あれやりましょうと言うたって、ついてくるのがなかなか難しいということなんです。

先ほど出ましたオムレツのまちに関しましても、商工会議所、商工会にも声かけましたけども、あくまで事業者の人たちと一緒にやっていきましょうということなんです。オムレツのまちにするしても、僕は別に、オムレツだけを売ろうと思ってやってるんじゃないんですよ。そこにある、自分とこの飲食店であるものも、オムレツもおいしかったけど、この食べ物がおいしかったな、またここへ来て、今度これ食べてみようかというような、そういうふうなものに仕上げたい。オムレツ

というのは一つの手段であって、結果ではないので、そういうふうに今回、先ほど出ました再織りのクッションであるとかというのも、当然、東京のデザイナーと一緒に今取り組んでいることでありますし、レッグウォーマーは、橋本という名前をちゃんと出るようにしておりますし、柿もＪＡの柿ではなくて、橋本市の柿として、これからそういうものをどんどん出していく。

そのためにも、やっぱり事業者さんがどれぐらいやる気になっていただくか、そのために補助金もつけてますから、販路開拓の補助金もつけてますから、そういう中で、今はしっかりした形で、そういう形で進めていきたいと思っていますので、今のところ、合併の仲立ちをするということは現在は考えておりません。

○議長（中本正人君）18番　土井君。

○18番（土井裕美子君）思いを語っていただきましてありがとうございます。私も決して合併をしてくださいとは申し上げておりません。メリット･デメリットを話し合った中で、どのように連携の強化を進めていくのかというテーブルに、一緒に着いたほうがいいのではないですかというふうに申し上げているだけでございますので、市長がそうやって両者の話をしっかりと聞いていただいて、間に入りつつ、ブランド推進室が間に入りつつ連携をとっているんだという、そういう方向性を出していただいているということはわかりましたけれども、ブランド推進室も３年をめどにというようなお話も伺っておりましたので、じゃあ、それから後はどうするのかなというようなこともありますのでね。

だから、あくまでも、決して合併をせよとは言ってないですよ。それはちょっとご了解いただきたいと思います。

民間事業者は、どちらに所属していただいても、皆頑張って一緒に、橋本が一個になって、連携とれて活性化したらいいよねと思っているはずですので、何かこう、枠がこういうふうにあるのが、ちょっとかた苦しいというか、進みにくい原因があるのではないかなと思って、そういう話し合いの場を設けていただいてはいかがかなというふうに思って提案をしただけでございますので、市長の判断として、今それで十分に連携がとれているのだという判断であれば、それはそれで結構でございますけれども、そこだけちょっと申し上げておきたいと思いますので、今後とも、九度山の関連の真田丸であるとか､それから、より大きな広域連携も考えていただいているようでございますので、この、今年のチャンスが本当に最後のチャンスやと思うぐらいのつもりで､しっかりと､それこそオール橋本、市民、行政、民間事業者、地域コミュニティも一体となって、観光、誘客に、経済活性化に向けてしっかりと取り組みを進めていっていただきたいと思いますので、私たちもしっかり協力をさせていただきますので、よろしくお願いをして、私の質問を終わらせていただきます。

○議長（中本正人君）経済部長。

○経済部長（笠原英治君）先ほど答弁保留させていただきました「真田幸村と戦国わかやま物語」、このパンフレットでございますが、制作部数が10万部でございます。そのうち、約3,000部橋本市のほうにいただいております。全国にお渡ししてますので、市町村にはそれぐらいの部数で来ておるということです。

○議長（中本正人君）18番　土井君の一般質問は終わりました。

この際、２時45分まで休憩いたします。

（午後２時29分　休憩）